

# 予知夢

## 英語英文学科3年 井上 瞳

「私は予知夢を見る」と言ったら、それを聞いた何人が信じてくれるだろう。

そもそも人間が夢を見るのは、一種のストレス解消法だという。怪我を負った時に自然治癒力が働くのと同じように脳から何らかの命令が下され、それが結局感覚として戻ってくるのだと。

ニーチェは言った。

『夢の世界において、我々は物の形の直接的な理解を楽しむ。あらゆる形相が我々に語りかけてくる。どうしてもよいもの、不必要なものなど何一つない』と。

私の夢の世界でも、不必要なものなどなかったのだろうか。

一番古い記憶は小学校三年生の時のそれだ。始業式の何日前に、『千葉』という新任の若い男の先生のクラスで、三年三組三番になる夢を見た。そして当日、教員生活五年目という千

葉先生が担任になり、出席番号は安達君、飯田さんに次いで見事に三番目だった。ただ、あの頃はまだそれが予知夢とか、そういう類のものであることを自覚はしていなかった。多分、どちらかといえば正夢程度にしか捉えていなかったのだろう。そしてそういう夢は、いつも忘れた頃にほわほわと現れ、私の脳内で未来を語るのだった。

小学校六年生の時には、連合運動会で千メートル走に出場し、ゴール直前で転倒した先頭の子を抜いて一位になる夢を見た。そんな都合の良いことがあるわけないと思っていたのだが、当日、スタートラインに並んだ時点で、男の子みたいな髪型をした細くて背の高い女の子の左の靴紐が微妙に解けかかっているのを見た。ピストルの音と共に一気にトップへと躍り出た彼女は、その予言通り、ゴールの五メートルほど手前で自分の靴紐に躓いて派手に転び、その約十メートル後方で息を切らしていた私はその横

を颯爽と走り抜けた。解けかかった靴紐のことを言及しなかった自分を褒めてあげたかったし、何だか物凄く気持ち良かった。

それが何故かは分からないが、私が未来を見るのは昼間か夕方の時間帯が多かった。つまり授業中の居眠りや通学中の電車の中、コタツに入つてのうたた寝などで、夜に見ることは皆無だった。勿論、見る夢全てがそういう夢ではなかったし見たいときに見たい内容のものが現れるわけではなかったが、自分は他の人とは違って特別なんだ、という自負の念が生まれ、更には周囲の人達に優越感さえ抱くようになっていた。ほとんどが自分にとって都合の良い夢で、たとえ悪い夢だとしても自分の力でどうにかするものが大半で、それ以外のものもさほど気にはならなかった。唯一の失敗は夢に見ていたにもかかわらず、中学校の卒業式に遅刻したことだ。多分あれは、一生の汚点になるのだろう。

高校生になると少しずつ恐怖を伴う夢を見るようになった。怖い夢、と一言で言っても出てくるのは悪魔とか幽霊とか実体のないものではなくて、踏み切り横断中に靴が線路に挟まって身動きが取れなくなる夢や、学校の廊下で黒光りするアノ集団に追いかけられる夢、トイレの水が溢れて一面水浸しになる夢などで、以上の

三つは実際には起らなかったことである。しかし一年生の冬、入学当初からいじめを受けていた小柄な女の子がいじめている側のリーダー格の女の子の腕をハサミで刺して転校することになる夢、当時特に男子の間で流行っていた失神ゲームで一人が意識を完全に失い救急車で病院に運ばれる夢、そして中庭の花壇の花が誰かに根こそぎ抜き取られて無残な姿になってしまった夢を立て続けに見、現実世界でも事は忠実に夢に従っていた。自分がそんな夢を見なければ、こんな事態にはならなかったかもしれないとひどく落ち込むことも多かった。どうにか夢そのものをコントロールできないかと、必死で考えたりもした。しかし結局は夢の恩恵に与ることになり、その時の快感に勝るものはなく、私は『夢』という宗教に一切の忠誠心を誓う敬虔な信者となったのだった。一度、デパートの抽選会で後ろの親子連れに順番を譲って二等のパソコンを当てる夢を見て、実際に最新の薄型ノートパソコンを手に入れた瞬間は、自分にできないことは何もない、くらいに思っていた。何が起つても、自分の力でどうにでもなるんじゃないか、とさえ。

悲しいことにテストの問題や答えを睡眠中に見ることはなく、私は三流大学の外国語学部に

何とか滑り込みで合格した。一年生の時のクリスマスイヴ、彼氏の家に向かう電車で私は「明日」の夢を見た。ケーキ屋さんでバイトしている彼は私のためにケーキを手作りしてくれて、予約していたレストランに向かう途中で「寒いね」と言った私の手をそっと自分のコートのポケットに誘い込み、そこで私の指は一円玉大の金属の輪に触れるのだ。それは、もう間違いない、それではなかった。目を覚ました私は駅を一つ寝過ごしていて、気分はどん底に近かった。

大袈裟に喜ぶ練習でもしておけ、というメッセージなのだろうか。次の日の夜は、一度したことをもう一度繰り返しているのかと思うくらい、その言動から服装から、本当に何から何まで同じで、折角のクリスマスも楽しさが半減だった。だけど仕方がないから当たり前にも知らないフリをしたし、レストランに着く前に「寒いね」と小さく言ったりもした。どうやってサイズを知ったのか知らないけれど、誕生石のアメジストが埋め込まれたそのリングは私の左の薬指にぴったりはまった。だけどそれから三ヵ月後、喧嘩をしたこともなかったし、浮気

の予兆も見られなかったのに、フラれる夢を見て心配になった私は、エイプリルフールの三時間前に彼に電話で別れを告げた。だって、武

器があるのに被害者にはなりたくなかったから。だけど、果たして、それが予知無であったか否かは、今となっては分からない。もう、廊下ですれ違っても目を合わせようとすらしないから。それは多分、そう、多分お互いに。

大学に入って二度目の夏、夢で見た六つの番号のおかげで、私の三百円は五十万円になった。一人掛けの小さなソファードVDレコーダー、それにデジカメを買い、ベッドとテレビを新調した。前から欲しいと思っていたヴィヴィアン・ウエストウッドの時計と、お店で見て一目惚れしたピアスとシルバリングとを大人買いし、計算が正しければ手に入れた賞金ももうマイナスになっていた。お金というものは不思議なもので、あればあったで簡単に使ってしまうけど、なければないで我慢できるし、そこまで苦労することもない。なんと言うか、全てのものに通ずる部分がある気がした。

同じ頃、こんな恐ろしい夢を見ていた。横浜駅から徒歩で五分ほど行ったところに、四、五台しか駐められないような小さな駐車場がある。夢に出てきた高校生くらいの男の子五人は、そこでホームレスらしき男性に殴る蹴るの暴行を加え、拳句の果てに誰かが履いていた靴下をその男性の口に詰め込み、べつ、と唾を吐きな

がら、「あー、気持ち良かったー」「明日も来っからな」「死ぬんじゃねーぞ」と、次々に言い放ち去っていった。男性は口と鼻、それから腕から血を流し、何故か、訴えるように私の方をじっと見るのだった。だけどその目は、私が本当は何も出来ないことを知っているかのようだった。毎日通っている駅だけど、いや、毎日使っているからこそ、自分のテリトリーの外に出るのは怖かった。きっとその日常を乱すのが気に食わなかったのだ。だから、きつと行ってみても何も起らないし何も変わらないと、あの夢のことは忘れるようにしていたのだ。けど意識せずに過ごせたのは、たったの三日間だけだった。その男性は、呼吸もせず、心臓も止った状態で発見された。明け方、三時過ぎのことだったらしい。衣服を身につけず、うつ伏せに倒れているところを見た近所の人が心配になって警察に通報したのだという。持ち物が一切なかったため、身元確認に丸二日かかり、最初は「事件に巻き込まれた可能性」を肯定していた関係者も、三日目には寝返っていた。直接の死因はタイヤ止めのコンクリートブロックに頭を強打したことで、周辺に日本酒や空になった缶ビールがいくつかが転がっていたため、警察は男性が泥酔して興奮状態に陥ったことで衣服を脱

ぎ、何かに躓いた拍子に転倒して頭を打ち、そのまま眠ってしまったのだろうと推測した。身体中に暴行を受けた様子が見られていた事実にもかかわらず、おそらく酔って通行人と喧嘩でもしたのでろうと、この事件は最終的に『事故』という形で幕を閉じた。夜中雨が降り続いたといっても、缶の飲み口についた唾液は、鑑定に出せるほど残っていなかったのだろうか。あの靴下は、現実世界には存在していなかったのだろうか。私ははつきり言って気が気でなかった。夢で見たあの男性の目は、きっと私が何もする気はないことを知っていて、だけど助けを求めていたのではないだろうか。私は、殺されてしまったあの男性に、呪われそうな気さえしていた。いや、だけど、そんなことがあるはずない。私は悪いことは何もしていない。あの事件と違って全く関係ない。それに、たとえそうなることを知っていたとしても、それを未然に防ぐことができたかなんて分からない。だいたい、こういう夢を見ました。だから近いうちにこういうことが起こります。気を付けてください。なんて、他人の私に言われて誰が信じるだろうか。そうだ。私には何もできなかった。あの男性は死ぬ運命だった。人間の最期は、誰にも、どうにも、できないのだ。

いつだったか、授業で『恐怖』と『不安』の違いを明確に理解しているか、と問われたことがある。私はその時、不安も恐怖も漠然としたものだと思っていた。先生が言うには、恐怖とはその対象がはつきりしていて、逆に不安はその気持ちを向ける対象がはつきりしていないもののことを指すらしい。誤解されるといけないから言っておくが、今の私は恐怖心も不安感も抱いてはいない。あるのは自信とほんの少しの怒りだけだ。

二年生になつてすぐ、一番の親友のお姉さんに子供が生まれた。誕生日は四月五日で名前は春樹。苗字が村岡で、あの有名な小説家と一字違いになった。もつとも、親友もお姉さんもその旦那さんも、ベストセラーになり映画化も決まった『ノルウェイの森』さえ知らなかったのだが。そして、悲劇が起つたのは春樹君が生まれて丁度一年が経った、春先のある昼のことだった。私はその親友と一緒にお姉さんの家にお邪魔していて、旦那さんが趣味で集めたというガンダムフィギュアを食い入るように眺めながら、一番かっこいいのはどれか、と、結構ヒートアップして言い争うように話をしていった。そして友達はいきなりフィギュアの数を数え始め、「百十七体」と言われた私はもう少し多い

気がして数え直してみた。どこかで間違えてなければ、その数は一つだけ少なくなっていた。その時、台所のほうから「春樹！だめ！」と叫ぶお姉さんの声が聞こえた。「春樹！だめ！だめ！」何かが何かにぶつかる音を聞いた私は、フィギュアをいくつか手に持ったまま、その声のしたほうへ行ってみた。昼食を作っているはずのお姉さんの姿はなく、リビングでおもちゃと戯れているはずの春樹君もどこにもいなかった。「春樹？おねえ？！どしたの？」決して広くはないそのマンションの一室に、綺麗なソプラノの音が響いた。不意に風が強く吹いて、リビングのテーブルの上にあったA4の紙が何枚か飛ばされ、その時初めて、ペランダのドアが開いているのに気がついた。カーテンが引かれていたから、最初はわからなかったのだ。両手に持ったガンダムのフィギュアをぼとつと床に落とした友達は、カーテンを開けて中途半端に空いたドアを勢いよく端に寄せた。ああ、多分気付いてしまったのだろう。ペランダの柵は真ん中がコンクリートの壁で、両端がなぜか細いポール二本で支えられていた。多分、それは子供でも簡単には通り抜けられないくらいの間隔で取付けられているのだけど、右のポールが一本なくなっていて、そこから落ちた可能性が

あるのが一歳になったばかりの赤ん坊なら話は別だ。半ば発狂したその子は手摺りから乗り出すようにペランダから下を見て、言葉を失いその場に座り込んだ。見たであろう、悲惨な光景を想像するのは容易だった。私はとりあえず彼女を家の中に引き戻してペランダのドアを閉め、携帯電話で救急車を呼びながら必死で階段を下った。そして、エントランスホールでゆっくりと開く自動ドアをすり抜けるようにして外へ出た。お姉さんは春樹君を両手で抱え、大量の血を流してその場に倒れていた。『血の海』というものを、生まれて初めて目にした私は、心臓の鼓動が激しくなり、体中の血が脈打っているのが分かった。春樹君は倒れているお姉さんの腕の中でこれでもかというくらいに泣き叫び、世界中の不幸をまるで一人で背負いこんだみたいに涙を流し続け、声が潤れてしまうんじゃないかと心配になるくらいだった。私は茫然とその場に立ち尽くし、お姉さんの半径三メートル以内に近づけないでいた。大袈裟に言えばそこに倒れている人は拒食症だった。壊れたポールの隙間から下に落ちたお姉さんの姿が見える気がした。ショックとか、悲しいとかじゃない。恐怖とか、不安でもなかった。ただただ、自分に絶望するだけだった。しばらくして救急

車が来て、多分それは十分かそこらだったのに、私にとっては三十分にも一時間にも感じられた。通報したのは誰かと叫ぶ救急隊員に小さく返事をした私は、泣きやむことを知らない春樹君を抱き上げて、お姉さんと一緒に救急車に乗り込んだ。病院に着いても春樹君の涙は止まることなく、心配した病院側の人が小児科の看護師を呼んでくれて、しばらく様子を見てもらうことになった。お姉さんはあつという間に集中治療室に運ばれたけど、その電気が消えるのにもそれほど時間はかからなかった。オペ室の男性に「ご家族の方ですか？」と尋ねられた私は首を振るのが精一杯で、宛先なしのまま病院の名前だけを打ったメールを作成する以外に、すべきこともできることも見つからなかった。死亡が確認されたのは手術が始まってから十五分後の午後一時半過ぎだった。最初にお母さんが血相を変えて現れ、しばらくして旦那さんが作業着のままで走って駆け付けた。ドラマみたいに「出来ることは全てしたのですが…」と、言った医師の前でお母さんは声にならない声を出して崩れ落ち、旦那さんは手の甲から血が出てもお、壁を殴り続けていた。私は世界で一番ちっぽけな動物になった気分だった。

「すいませんでした…一緒にいたのに…本当に、



本当に……」

言葉に詰まった私に、旦那さんはこう言った。「おまえは関係ないから席を外せ」と。廊下の途中で眠った春樹君を抱えた若い看護師とすれ違った。東京の会社に勤めているお父さんは、それから一時間後にタクシーでやっと病院に到着した。友達は、結局その日は病院には来なかったらしい。お葬式の日に見た友達の顔は蒼白く、正面は向いているが表情を崩さないように下唇を噛み、堪えながらお辞儀を繰り返していた。

言えよよかったのかもしれない。言った後の未来なんてわからないし、もう過去はどうにもできないけれど、だけど私は心底後悔していた。お姉さんまであの狭い隙間から落ちてしまうとは思っていなかったのだ。言っていれば何か変わっていただろうか。ペランダのドアが開いているのに気がついたときに、さりげなく閉めておけばよかったのだろうか。ガンダムなんかに興味はないと、友達の誘いを断ってあのまま春樹君と遊んでいればこんなことにはならなかったのだろうか。

私が見た夢について言及しなかったせいで二人目が死んでしまったあの日から、私は夜も眠れなかった。目を閉じることさえ恐怖だった。瞬きさえ耐え難かった。夢を見るのが怖くて怖

くてたまらなかった。確かに私は春樹君がペランダから落ちて死ぬ夢を見た。最悪の事態を防ぐべく、誰かに助言することも一切なかった。それは、だって、だって春樹君だけだったから。春樹君は、生まれつき両目が全く見えていなかった。

彼はきつと今も元気にご飯を食べ、新しい言葉覚え、泣いて誰かを困らせているのだろう。その目は一生見えるようにならないのに。だからその選択は正しいのだと思った。両親から苦悩と差別の目を取り払い、春樹君を待ち受けている暗い未来を防げるのだから、間違っているわけがないと思った。

五日間、煙草とコーヒを三度の食事の代わりにし、剃刀とコンパスの針で体中に傷をつけながら睡魔に打ち勝っていた私は、六日目にととう栄養不良で倒れ、約百三十時間ぶりに眠りについた。夢は、見なかった。

二週間ほど学校を休んだが、とりあえず正気というか生気を取り戻した私はまた、以前と変わらず大学に行き、真面目に授業を受け真面目にノートをとった。一度自分が国道で交通事故を起こし死ぬ夢を見たけれど、飛ばしすぎて事故にあう前に白バイにスピード違反で捕まった。一万五千円の罰金と、二万円の初心者講習

(強制)は、月に八万のアルバイト代で生活している大学生には大分痛い出費だった。それから一ヶ月ほどで友達も元氣を取り戻し、私達はまた二週間に一度くらいのペースで定期的に遊ぶようになった。春樹君は一歳二ヶ月になつてからつかまり立ちを覚え、一人で歩けるようになるまでにはそれからさらに三ヶ月かかった。言葉を覚えるのも遅かったけど、それでも皆に愛されていた。

九月末、夏休みが明けて最初のゼミの授業で、今期は『Past, Dream and Reality』という短編集から幾つか選んで読んでいきたいと思っています、と先生が言ったときは、心臓が一瞬止まったかと思った。

「最初に読む Kazuo Ishiguro の『A Family Supper』をこれから配るので、来週までに読んできてください。因みにこの Kazuo Ishiguro という人は、日本人なんですけど……」

先生の言葉も、後半部分はほとんど右から入って左へ抜けていった。「Dream」という単語一つが脅威だった。もう、夢に翻弄されるのは懲り懲りだった。予知夢なんて見たくない。いや、夢なんて見たくない、本気でそう、思っていた。だけど授業を終えて電車に乗り自宅に向かう途中、私は不覚にも目を閉じてしまった

のだ。そして十分か十五分の間に、出来ればもう一生見たくない、と願っていた夢を見ることになる。そう。人が、死ぬ夢だった。しかも知らないどころか誰かさんじゃない。通い慣れたその狭い部屋では、テレビが何かを訴えるように情報を発信し続け、沸騰したやかんのお湯が溢れてジューっという音をたてていた。グレイのカーペットは一部だけが黒っぽくなり、私がブレゼントした白いTシャツは真っ赤に染まっていた。ふと、唯一光を放っていたテレビ画面に目をやると、その上部に小さくテロップが流れた。

『この地震による津波の心配はありません。』揺れたのには気付かなかった。

目を覚ますと、私の心臓の鼓動はネズミのそれくらい速くなっていた。とにかく知らせなくちゃいけない。あの人に死なれたら、今あの人を失ったら、私は立ち直れる気がしなかった。

全部を話したつもりはなかったのだけど、深呼吸をして時計を見たら二時間近く喋りっぱなしだったみたいだった。話を聞いた彼は鼻で笑った。

「ばかじゃねえの。そんなことあるわけないじゃん。」

そして「ちゃんと聞いてたからご褒美な。」

とだけ言うと、鎖骨にキスをして、私をベッドに押し倒した。

「今そんな気分じゃないの。真面目な話してるんだから。」

「俺だって大真面目だ」

そう言ってほんの少し冷えた手でシャツをまくしあげた彼の肩を私は両手で跳ね返し、そのお腹を右足で蹴とばした。笑いながらベッドから落ちた彼は一度大きく叫び、うめき声をあげながら私の名前を読んだ。何事かと思って体を起こすと、そこには痛みで歪んだ顔があった。

ごろっと転がった彼の背中には、一週間前私が割ってしまった、ただ言い出せなくてベッドの下に隠しておいたガラスのお皿の破片が刺さっていた。背中じゅうにだ。首筋に刺さった五センチ角程の大きな破片は、肌にますます食い込んでいくように見えた。それは結婚式の引き出物で貰った三枚セットの高級なお皿で、「これにあうくらい、おいしい料理作ってな」と子供みtainな顔で言われたのがついこの前のことだった。

人を、殺してしまった。あの夢は誰かのせいで偶然死んでしまう夢じゃなくて、私が、私自身が殺してしまった夢だったなんて。どうしよう。どうしよう。どうすればいい。何がどうな

っているのかわからなかった。どうすればいいのかわからなかった。何が正しいのかわからなかった。私には、どうすることもできなかった。

ふと、パトカーのサイレン音が、確実に近付いてきているのが分かった。この状態じゃ言い訳のしようがない。だってそれはもう、間違っていたそのサイレン音は、何故か少しずつ小さくなっていく。遠のいていくその音に一瞬わけが分からなくなつて、すぐに自分に笑えてきた。誰にも見られていないはずなのに、しかもこんなすぐにパトカーがくるはずない、と。目を見開き、口からよたれを垂らしたその醜い顔の青年は、もはやそのアパートの住人でしかなかった。私はテレビの上部に映ったスマートラ島沖地震のニュース速報を眺めながら、これからすべきことを考えていた。

無意識に指紋をつけないようやかんの火を消して、それから毛布に包まってベッドに横になった。

約一時間後、目を覚ました私が一番にするのは叫ぶこと。二番目が涙を流すこと。三番目は叫び声を聞いてやってきた誰かの胸に飛び込むか、隣の住人に助けを求めること。そしてその後……